

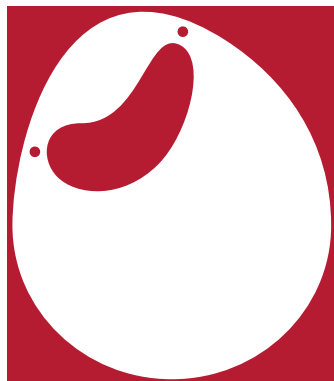
「みんなの道後温泉 活性化プロジェクト」で 2022年度に「道後オンセナート2022」を開催します

日本最古といわれる道後温泉では、本館保存修理後期工事期間中の新しい活性化策「みんなの道後温泉 活性化プロジェクト」を2024年3月まで実施しています。2021年度は「地熱づくり」をテーマに、地元集客や関係人口の構築を進めています。2022年度は、観光人口を拡大し、観光消費を増やすため、4年ぶりに「道後オンセナート2022」を、2022年4月28日(木)から開催します。「道後オンセナート2022」は、2021年に作品公開した大竹伸朗さん、蜷川実花さん、隅川雄二さん、尾野光子さんの4名に加え、約30組のアーティストやクリエイターが参加します。自由に鑑賞できる常設のアート作品に加え、イベントを随時開催し、いつ来ても楽しめる、何度も訪れたくなる芸術祭を目指します。テーマは「いきるよろこび」です。道後温泉は昔も今も、人の身体を、心を温め続けてきました。心身を癒し、活力ある人生を送り、また、活気あふれるまちを未来につなぐため、地域とアーティストやクリエイターが協力し、世界を温めます。

「みんなの道後温泉 活性化プロジェクト」で、観光消費を増やしたり、域内経済循環を広げたりしながら関係人口を築き、人材を育成して持続可能なまちを実現します。



「道後オンセナート2022」ポスター



DOGO
STAY HOT STAY CREATIVE

「道後オンセナート2022」の概要

- 【名称】 道後オンセナート2022 (どうご おんせなーと にせんにじゅうに)
- 【テーマ】 いきるよろこび
- 【会期】 2022年4月28日(木)~2023年2月26日(日)
- 【場所】 道後温泉地区
- 【主催】 未来へつなぐ道後まちづくり実行委員会
- 【企画プロデュース】 スパイラル/株式会社ワコールアートセンター

テーマ

「いきるよろこび」

世界中の全ての人々が求める、親しい人との再会の喜び、声を掛けあい寄り添って実感する安らぎ。新しい時代を開こうとする強いエネルギーがふつふつと湧くなか、道後温泉では、アートを通じて人々の五感を開き、蓋をしていた熱情を呼び起こします。日々がなにより楽しく感じられるよう、みんなで、道後で、温まろう。

「道後オンセナート2022」ポスターデザイン

デザイナー

小林 一毅（こばやし いっき）

グラフィックデザイナー。1992年滋賀県彦根市生まれ。2015年多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。資生堂クリエイティブ本部を経て2019年に独立。東京TDC賞、JAGDA新人賞、日本パッケージデザイン大賞銀賞、Pentawards Silver受賞。



小林一毅さん

コンセプト(小林一毅さん)

2021年から継続する熱気の造形によるコミュニケーションを拡張し、直感的に喜びを感じられるようなプリミティブな造形と色彩表現によって「いきるよろこび」を表現します。オンセナートの告知物は、様々な媒体に応用され、まちの至る所に掲出されます。多くの市民が日常的に目にするものになるため、ポスターは言葉のまだわからない幼児から100歳のご老人まで、老若男女様々な人達に歓迎される、デザインでありたいと思っています。「いきるよろこび」とは何か、それを個人が明確に理解するのは難しく、感じるものだと思います。深い感嘆は展示作品を前にした時にとっておいて、告知物としては「綺麗、美しい」「元気になった」「明るい気分になる」まずはそんな感想で良いのです。そうした感想を抱くこともまた「いきるよろこび」であって、町中の様々な場所で「いきるよろこび」の入り口に誰しもが平等に立てることが重要なのです。そうした気持ちが醸成されて芸術祭に足を運ぶという意味では、気持ちを作るための告知物という立ち位置になります。色と形、最もシンプルな構成要素によって表現されたポスターは、一度見たら記憶にしっかりと刻まれるでしょう。いつでも思い出せて、コミュニケーションが取れることも大切なのです。

「道後オンセナート2022」の構成と特徴

① 常設展示作品

半径500mの道後温泉地区に作品がぎっしり。歩いて楽しむ芸術祭

道後温泉の魅力の一つは、歩いて巡れるコンパクトな温泉街です。起伏があって、さまざまな表情に満ちたまちの地理的条件を生かし、保存修理工事中の道後温泉本館の素屋根テント膜に施された巨大な大竹伸朗さんの作品を中心に、歴史ある道後の風情と、現代アートをともに楽しめる作品を展示します。国籍や性別、年代、作風も異なるアーティストやクリエイターたちが、道後のまちに、人に、エネルギーを注ぎます。

① オンセナートコレクション

国の内外で活躍するアーティストが、「いきるよろこび」をテーマに、個性的で感性豊かなアート作品を展示します。

【参加アーティスト】（五十音順）

- ・市原えつこ（いちはら えつこ）
- ・Adrian Steckeweh（エイドリアン・シュテッケヴェー）
- ・oblaat（おぶらと）
- ・TIDE（たいど）
- ・高橋 匡太（たかはし きょうた）
- ・谷川 俊太郎（たにかわ しゅんたろう）
- ・力石 咲（ちからいし さき）

【展示中のアーティスト】

- ・大竹 伸朗（おおたけ しんろう）
- ・尾野 光子（おの みつこ）
- ・隅川 雄二（すみかわ ゆうじ）
- ・蜷川 実花（にながわ みか）

② マチコトバ

「文学のまち、松山」の特色を生かす言葉のプログラム

「マチコトバ」は、道後のまちを一冊の詩集に見立てた展示です。「いきるよろこび」をテーマに、俳人やアーティスト、詩人、クリエイターなど多様な参加者が、それぞれが思いを込めて選んだ言葉を路地裏、坂道、駐車場、建物の壁面などに展示します。文学のまちならではの、散策を楽しんでもらうプログラムです。

道後温泉の隠れた魅力が感じられる場所で、風景と一緒に言葉を読み、それぞれの言葉から「いきるよろこび」に向き合い、ゆっくりとしたまち巡りを楽しめます。

「マチコトバ」参加者

・夏井いつき

道後に深く関わる俳人・夏井いつきさんが四季折々の言葉をつづります。長年俳句の楽しさを伝える活動を行い、道後・上人坂に「伊月庵」を構え、ひみつジャナイ基地で「句会ライブ」を開催されています。2022年1月に発売された新作の句集、伊月集『鶴』から、厳選した春夏秋冬の句を上人坂に複数設置します。季節ごとに句を置き換えます。

・SUPER BEAVER(すーぱーびーばー)

若い世代に絶大な人気を誇るミュージシャンのSUPER BEAVERが、2022年2月23日に発売された最新アルバム「東京」も含めた楽曲の中から、複数の歌詞を選び、道後のまちに展示します。まち全体に展示された作品を巡りながら、アーティストの想いを感じてもらいます。

・クリエイティブステイ参加クリエイター、関係人口サミット参加クリエイター、松山市在住クリエイター 13名

2021年度に「地熱づくり」として開催した、「クリエイティブステイ公募プログラム」や「関係人口サミット」に参加し、道後温泉との関わりが生まれたクリエイターが、引き続き道後に関わります。地元で活動するクリエイターも参加し、みんなで道後温泉を盛り上げます。13名は、人に手向けたい、手渡したいと感じる温かい詩など、深く響く言葉を選び、展示します。選ばれた言葉は、海外の方の言葉から、松山ゆかりの方の言葉まで多様です。言葉そのものが持つ意味や、生まれた背景などを捉え、それぞれのアーティストやクリエイターが道後滞在中に足を運んだゆかりの場所や、道後温泉の隠れた魅力、言葉の原典などが感じられる場所に展示します。

【クリエイティブステイ参加クリエイター】※五十音順

- ①石川 直樹(いしかわ なおき) ②浦島 茂世(うらしま もよ) ③江六前 一郎(えろくまえ いちろう)
④小野 美由紀(おの みゆき) ⑤カニエ・ナハ ⑥きたむら けんじ ⑦日下 慶太(くさか けいた)/ケイタタ
⑧永本 冬森(ながもと ともり) ⑨野口 あや子(のぐち あやこ) ⑩三浦 亜美(みうら あみ) ⑪桃江 メロン(ももえ めろん)

【関係人口サミット参加クリエイター】⑫指出 一正(さしで かずまさ)

【松山市在住クリエイター】⑬山澤 香奈(やまざわ かな)

② イベント

常設作品に加え、オープニング、秋、冬、週末にイベントを実施

蜷川実花さんの作品が施された道後温泉別館 飛鳥乃湯泉 中庭「ハダカヒロバ」や上人坂、道後公園などを生かし、道後の賑わいを生み出す多彩なイベントを開催します。地元のパフォーマーやクリエイティブステイ公募プログラムに参加したアーティストやクリエイターからも登場し、いつでも楽しめる芸術祭、何度も訪れたい道後温泉を実現します。

①オープニングウィーク

期間：2022年4月28日(木)～2022年5月8日(日)

「道後オンセナート2022」のスタートを彩る特別ウィークです。オンセナートコレクション、マチコトバの参加アーティストやクリエイターのパフォーマンスなど、イベントを開催します。

②ハダカヒロバ秋まつり

期間：2022年10月10日(月・祝日)～2022年10月23日(日)

秋の盛り上がり演出するハダカヒロバの特別週間です。パフォーミングアーツを中心に構成します。ハダカヒロバの芸術監督を務める、劇団快快 (FAIFAI) の野上絹代さんの監修で祝日と休日を中心に、ユニークなプログラムを上演します。

③ひかりの実

期間：2022年12月16日(金)～2023年1月15日(日)

高橋匡太さんが、道後の冬の風物詩として親しまれている道後公園での「ひかりの実」の展示やワークショップを開催します。

④週末道後座

ハダカヒロバ、上人坂などを中心に、道後温泉地区の週末の賑わいを創出します。パフォーミングアーツを中心に多彩な催しを開催します。

「道後オンセナート2022」開幕直前記者発表会

【日時】 2022年4月6日(水曜日) 午後2時～午後3時30分

【会場】 スパイラル3Fスパイラルホール (東京都港区南青山5-6-23)

【主催】 未来へつなぐ道後まちづくり実行委員会

【内容】 「道後オンセナート2022」を広く周知し、観光誘客のため、報道機関や観光事業者向けに、発表会を実施します。

オンセナートコレクション 参加決定アーティスト (五十音順)

市原 えつこ 読み：いちはら えつこ 	メディア・アーティスト。 自分の空想上のアイデアを発明品にして、世の中に投げかける活動を行う、妄想インベンター。 1988年生まれ。早稲田大学卒業。 日本的な文化・習慣・信仰を独自の観点で読み解き、テクノロジーを用いて新しい切り口を示す作品を制作する。 美術の文脈に依らず広く楽しめる作品性と日本文化に対する独特のデザインから、世界中の多様なメディアに取り上げられている。 第20回文化庁メディア芸術祭優秀賞。 2018年にアルス・エレクトロニカ賞でオノラリー・メンション受賞。
Adrian Steckeweh 読み：エイドリアン・シュテッケヴェー 	建築家・CGI (Computer Generated Imagery) アーティスト。 1987年生まれ。ドイツ出身。 Omega Centauri (オメガ・センタウリ) の作家名で仮想現実と現実の狭間で実験を試みながらInstagramエフェクトやグラフィックなども制作する。 Instagramのアカウント名は「@omega.c」
oblaat 読み：おぶらーと 	メンバー非公開の現代詩人グループ。 2010年結成。 メディアアートとしての詩の表現を探求。 『車座』(象の鼻パーク, 2011年)、 『となりの宇宙』(東京都現代美術館, 2014年)、 『distance』(MIND TRAIL, 2020年)、 『空気の日記』(ウェブマガジンspinner, 2020年) など。
TIDE 読み：たいど 	ペインター。 1984年生まれ。現在は東京を拠点に活動をしている。 20代前半に滞在していたオーストラリアで漫画家・歴史家の水木しげる氏の作品に出会い、独学で絵を描き始める。 2009年に東京に戻り、アーティストとしての活動を本格的にスタート。 一貫してモノクロームの世界を描き続けている。
高橋 匡太 読み：たかはし きょうた 	1970年京都生まれ。 1995年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。 光や映像によるパブリックプロジェクション、インスタレーション、パフォーマンス公演など幅広く国内外で活動を行っている。 京都市京セラ美術館、東京駅、十和田市現代美術館など建築物へのライティングプロジェクトは、ダイナミックで造形的な光の作品を創り出す。 多くの人とともに作る「夢のたね」、「ひかりの実」、「ひかりの花畑」など大規模な参加型アートプロジェクトも数多く手掛けている。

谷川 俊太郎

読み：たにかわしゅんたろう



撮影：深堀瑞穂

詩人。

1931年東京生まれ。都立豊多摩高校卒。

1952年第一詩集『二十億光年の孤独』出版。

以後、詩、エッセー、脚本、翻訳などの分野で文筆を業として今日にいたる。

詩集に『21』『落首九十九』『ことばあそびうた』『定義』『みみをすます』

『日々の地図』『はだか』『世間知ラズ』『minimal』など、

エッセー集に『散文』『ひとり暮らし』、絵本に『わたし』『ともだち』

『もこもここ』など。

息子で音楽家の谷川賢作との共演にCD『クレーの天使』『家族の肖像』など。

近刊は『バウムクーヘン』『あたしとあなた』『ページュ』など。

2010年よりoblaatの同人としても活動。

カ石 咲

読み：ちからいし さき



1982年埼玉生まれ。

多摩美術大学美術学部情報デザイン学科卒業。

編むという手法で、場所のネットワークにまつわるインスタレーション作品を

制作している。亡くなった母に幼少時に教わった編み物を、

人と繋がる手がかりとして作品制作に取り入れる。

縄文時代から続く生活用品を作るための技術である編み物に、

つながりを作る技術という新しい価値を見出すとともに、

様々な場所や人とのつながりを希求するようになる。

ハダカヒロバ 芸術監督

野上 絹代

読み：のがみ きぬよ



1982年東京生まれ。

多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科卒業。

クラシックバレエ、高校から振付け活動を開始。

大学在学中より同級生らとともに劇団小指値（現：快快（FAIFAI））を旗揚げ。

以降、俳優・振付家として同団体の国内外における活動のほとんどに参加。

ソロ活動では俳優・振付に加え演出力を武器に演劇／ダンス／映像／

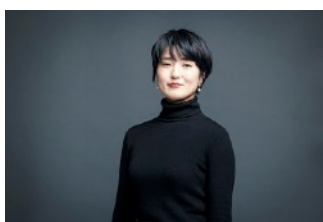
ファッションショーなど幅広く活動。

マチコトバ 参加者（全15組）

夏井 いつき 読み：なつい いつき 	俳人。 1957年愛媛県南宇和郡愛南町(旧内海村)生まれ。松山市在住。 8年間の中学校国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。 俳句集団「いつき組」組長。俳句の授業「句会ライブ」、「俳句甲子園」の創設に携わり、TBS系「プレバト!!」俳句コーナー出演などテレビラジオでも活躍。 松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」選者。2015年より初代俳都松山大使。 第44回放送文化基金賞(個人)、2021年NHK放送文化賞。第4回種田山頭火賞。 句集『伊月集 鶴』（朝日出版社）、『夏井いつき、俳句を旅する』（悟空出版）、など著書多数。
SUPER BEAVER 読み：すーぱーびーばー 	渋谷龍太(Vo)、柳沢亮太(G)、上杉研太(B)、藤原“33 才”広明(Dr)の4人によって2005年に東京で結成。 2009年6月にEPICレコードジャパンよりシングル「深呼吸」でメジャーデビュー。 2011年に活動の場をメジャーからインディーズへと移し、年間100本以上のライブを実施。 2012年に自主レーベルI×L×P× RECORDSを立ち上げたのち、2013年にmurffin discs内のロックレーベル[NOiD]とタッグを組んでの活動をスタートさせ、2018年4月には初の東京・日本武道館ワンマンライブを開催し大成功のうちに終える。 2020年には結成15周年を迎え、Sony Music Recordsと約10年ぶりのメジャー再契約し、その後もドラマやCMでの楽曲の使用、最近では映画「東京リベンジャーズ」主題歌に「名前を呼ぶよ」が使用され話題に。2022年2月23日(水)にはフルアルバム『東京』を発売し全国ホール・ツアーを開催。10月から12月に自身最大規模となる4都市8公演のアリーナツアーも控えており、今最も勢いのあるロックバンド。

【クリエイティブステイ参加クリエイター・関係人口サミット参加クリエイター・松山市在住クリエイター】13名
(クリエイティブステイ参加クリエイター)※五十音順

石川 直樹 読み：いしかわ なおき 	写真家。 1977年東京生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、2作品を発表し続けている。2010年『CORONA』（青土社）で土門拳賞、2020年『まれびと』（小学館）、『EVEREST』（CCCメディアハウス）で日本写真協会賞作家賞を受賞。開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』ほか著書多数。最新刊に『STREETS ARE MINE』（大和書房）など。
浦島 茂世 読み：うらしま もよ 	美術ライター。 大学で美学美術史を専攻し、制作会社勤務を経てフリーランスに。時間を見つけては美術館やギャラリーへ足を運び、国内外の旅行先でも美術館を訪ね歩く。著書に『東京のちいさな美術館めぐり』、『企画展だけじゃもったいない 日本の美術館めぐり』、『猫と藤田嗣治』など。文化庁文化審議会博物館部会委員を務めるほか、講演やカルチャーセンターでの美術講座講師など、美術の楽しさを伝える活動を精力的に行っている。
江六前 一郎 読み：えろくまえ いちろう 	編集者・ライター。 1977年千葉県生まれ。江六前(えろくまえ)は本名。岩手県一戸町の同名集落の名に由来する。1997年、国立木更津工業高等専門学校卒業。 2002年、編集プロダクション「タミワオフィス」に入社。歴史や芸術、旅をテーマにした雑誌の編集に携わる。 2012年から食の専門誌『料理王国』を担当、副編集長も経験。国内外の一流レストランやシェフを取材、取材店舗はのべ350店におよぶ。 2020年4月からフリー編集者に。愛媛県食材では媛っこ地鶏が好き。

小野 美由紀 読み：おの みゆき 	小説家・SFプロトタイパー。 1985年東京生まれ。著書に銭湯を舞台にした青春小説『メゾン刻の湯』（ポプラ社）『人生に疲れたらスペイン巡礼』（光文社）『傷口から人生。メンヘラが就活して失敗したら生きるのが面白くなった』（幻冬舎文庫）絵本『ひかりのりゅう』（絵本塾出版）など。 2020年4月に刊行された”女性がセックス後に男性を食べないと妊娠できない世界になったら？”を描いた恋愛SF小説『ピュア』は、早川書房のnoteに掲載直後から話題となり20万PV超を獲得。 WEB 媒体・紙媒体の両方で執筆活動을 続けながら、SFプロトタイパーとしてWIREDの主催する「Sci-Fi プロトタイピング研究所」の事業にも参加。オンラインサロン「書く私を育てるクリエイティブ・ライティングスクール」主催。
カニエ・ナハ 読み：かにえ なは 	詩人。 2010年「ユリイカの新人」としてデビュー。詩集『用意された食卓』でエルスール財団新人賞、第21回中原中也賞受賞。新聞や雑誌に詩、エッセイ、書評等を寄稿するほか、本のデザインや手製本による詩集プロジェクト、朗読パフォーマンス、アーティストとのコラボレーションを多数行っている。 主な展示に「MOT サテライト2017春」（東京都現代美術館）「さいたま国際芸術祭2020」「謳う建築」（WHAT）など。
きたむら けんじ 	劇作家、放送作家。 劇団東京フェスティバル主宰。1973年生まれ。知的障害者を積極的に雇用する実在の企業をモデルに描いた『幸福な職場』（2009年）は、2017年にテレビ朝日、エイベックス・エンターテインメント、クオーレの共催で再演。 2012年、東日本大震災後の福島県小名浜にある風俗街を舞台に描いた『泡』を上演。翌年、福島中央テレビ主催で福島4都市ツアー公演を行う。沖縄基地問題、東京大空襲など社会的題材を人情喜劇のタッチで描くことに定評がある。 放送作家としてラジオ番組『STEP ONE』『JUMP OVER』『ONE MORNING』などを担当。ドキュメンタリー映画『わたしは分断を許さない』では脚本を担当。
日下 慶太 / ケイタタ 読み：くさか けいた / けいたた 	コピーライター・写真家。 1976年大阪生まれ、大阪在住。コピーライターとして働きながら、ケイタタ名義で、写真家UFOを呼ぶためのバンド「エンバーン」のリーダーとしても活動中。商店街のユニークなポスターを制作し町おこしにつなげる「商店街ポスター展」の仕掛け人。著作に自伝的エッセイ『迷子のコピーライター』（イーストプレス）、写真集『隙ある風景』（私家版）。 佐治敬三賞、グッドデザイン賞、TCC 最高新人賞、造本装幀コンクール日本印刷業連合会会長賞ほか受賞多数。
永本 冬森 読み：ながもと ともり 	現代美術家。 和紙にボールペンで描く独特の作風が注目される。 デビューからおよそ20年に渡りカナダ、アメリカを拠点に活動し、現在は山陰地方を拠点に、伝統的な手漉き和紙や建具の職人たちの協力のもと制作を続けている。定期的に個展を開催するほか、山崎まさよしデビュー20周年を記念した展覧会『音のない山崎まさよし』をはじめ、異業種コラボレーションも多数。日本での活動を記録したドキュメンタリー映画『Kinosaki Days』（2019年）では、ミラノ国際映画祭（2019年）、ロンドン国際映画監督祭（2020年）でドキュメンタリー部門最優秀賞を受賞。
野口 あや子 読み：のぐち あやこ 	歌人。 1987年岐阜生まれ、名古屋在住。第一歌集『くびすじの欠片』にて現代歌人協会賞を最年少受賞。歌集『夏にふれる』『かなしき玩具譚』『眠れる海』。 岐阜新聞にて月一エッセイ「身にあまるものたちへ」連載中。 2019年11月号「小説新潮」にて短編「ジュリアナ様」で小説デビュー。 『ホスト万葉集』では俵万智、小佐野弾とともに編者を務める。

三浦 亜美 読み：みうら あみ 	起藝家・アーティスト。 声楽専攻からバックパッカーを経て、複数の会社を経営。その後、ベンチャーキャピタルに籍を置き、新しい価値を生む企業への投資とサポートを行う。伝統産業とビジネス、工学を融合した“文化工学”を提唱し、株式会社ima(あいま)を2013年に立ち上げ、様々な伝統産業の継承をサポートすべく事業を行う。また“起藝家”として、自身の経験から感じた社会への疑問をアートで表現し、起業家としてビジネスを通じ課題解決を行う。
桃江 メロン 読み：ももえ めろん 	プロデューサー・著述家。 早稲田大学卒業後、渡米。NYのコロンビア大学大学院・映画学科で修士号取得。在学中に脚本・監督した短編映画、数本が、全米とヨーロッパで開催された映画祭で、入賞上映される。 2010年、小説「表参道 EXIT A4」でランダムハウス講談社新人賞受賞。 現在は、海外からのアーティストの招聘、日本のミュージシャンの海外ツアーなど、代官山のイベントスペース、「晴れたら空に豆まいて」を中心に、音楽、映画、伝統芸能のイベントをプロデュース。

(関係人口サミット参加クリエイター)

指出 一正 読み：さしで かずまさ 	『ソトコト』編集長。 島根県「しまことアカデミー」メイン講師、山形県小国町「白い森サスティナブルデザインスクール」メイン講師、奥大和地域誘客促進事業実行委員会、奈良県、吉野町、天川村、曽爾村「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」エリア横断キュレーターをはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房、総務省、国土交通省、農林水産省、環境省などの国の委員も務める。経済産業省「2025年大阪・関西万博日本館」クリエイター。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。
--	---

(松山市在住クリエイター)

山澤 香奈 読み：やまざわ かな 	1983年愛媛県生まれ、愛媛県松山市在住。 愛媛県立伯方高校在学中、第三回俳句甲子園に出場し優勝。 現在、子どもや学校の保護者向けの句会、月刊誌の編集、旅行者向けの俳句作り案内などを行う。NPO 法人俳句甲子園実行委員会所属。現代俳句協会青年部、俳句集団いつき組組員。
--	---

取材対応、問い合わせについて

アーティストやクリエイターへの直接の取材はお控えください。

取材の申し込みは、未来へつなぐ道後まちづくり実行委員会事務局（松山市役所道後温泉事務所内）または下記の広報窓口にご連絡してください。

【公式ホームページ】 <https://dogoonsenart.com>

※新型コロナウイルス感染症の状況により、プログラム内容が変更になる場合があります。



公式HP

【本件に関するお問い合わせ】

未来へつなぐ道後まちづくり実行委員会事務局（松山市道後温泉事務所内）

担当：菅、越智、徳岡、岡田

TEL：089-921-6464 / FAX：089-934-3415 / MAIL：dogojimu@city.matsuyama.ehime.jp

【広報窓口】

「みんなの道後温泉 活性化プロジェクト」広報窓口：清水

TEL：089-995-8783 / 080-6280-6970（問い合わせ時間：10:00-18:00/土・日曜・祝日以外） / MAIL：press@dogoonsenart.com